

おぼろげな会ニュース

新しい年に

「平和」と「希望」を刻む

米田佐代子

新しい年を迎えて今年のキーワードは、と聞かれたら、「憲法を守りぬく覚悟」「わたくしは永久に失望しない」と書いたらいてうに思いを馳せ、「平和」と「希望」を選びたいと思います。

ご寄付に励まされて

運営費の赤字や、活動の困難などを抱えながらも大きな前進がありました。寄付のお願いに、たくさんの方の励ましとともに予定を大きく上回るご寄付があり、「らいてうのころざし」に共感してくださる方がたの思いの深さに感動しました。そのお気持ちをかたちにして残したいと、ご寄付の一部で隣接地を入手、春には「らいてうさんのお庭」をひらきます。

感謝の意をこめて小冊子『らいてうの家 四季ものがたり』もつくりました。

オバマ大統領に送った手紙

アメリカのオバマ大統領が「核兵器のない世界を」と演説したのをきっかけに、一国の壁を越え



て平和な世界をつくろうという動きが強まっている今年こそ「らいてうの出番」です。会では昨年十一月、オバマ大統領来日に合わせて大統領宛ての手紙をアメリカ大使館に届けました。(写真)

それが、らいてうが第一次大戦後「自国の軍備に固執して他国のみ軍縮を要求するのは国家の利己心」と指摘したことを紹介、核大国のアメリカ自身が自国の核兵器削減・廃絶に向かって勇氣ある行動をとるよう求め、今年開かれるNPT再検討会議を真に「核廃絶」への一歩とすることを要望したものです。

百年の女たちのメッセージを今に

今年は「国際女性デー」百年です。『青鞥』創刊からやがて百年、らいてうが一九五〇年に「軍事基地も軍隊も要らない」と訴えてから六〇年、「安保をなくして平和な日本を」のデモをしてから四〇年です。

日本が戦争と抑圧の苦い歴史をのりこえ、「平和で平等な世界」への道を歩むために「百年の女たちのメッセージ」に心を通わせ、「平和」と「希望」を胸に刻んで今年も活動しましょう。(平塚らいてうの会会長・らいてうの家館長)

第十三回「女性文化賞」を受賞

十二月十一日、詩人高良留美子さんによる「第十三回女性文化賞」を「らいてうの家」が受賞いたしました。「反戦平和の願い実現と地域女性運動の掘り起こし」の活動を評価してくださったことを感謝するとともに、これからいっそうご期待に応えて地域に根を下ろした活動をしたいと思えます。賞金五十万円と『高良とみの生と著作』(全八巻)『写真集世界的にのびやかに―高良とみの行動的生涯』もいただきました。有難く活用したいと思えます。

高良留美子さんのプロフィール



詩人・評論家・哲学者・女性史家。日本女子大付属高校を経て東京藝術大学・慶応大学で学び、フランス留学後国立近代美術館に勤務。アジア・アフリカ文学運動に参加。89-96年城西大学客員教授。94年新フェミニズム批評の会に参加。97年「女性の文化創造者を励まし、支えるために」女性文化賞を創設。第13回H氏賞、第6回現代詩人賞、第9回丸山豊記念現代詩賞を受賞。

母・高良とみの著作も編集。『恋する女―葉・晶子・らいてうの時代と文学』など著書多数。

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

新春特集

私だけが知っている

「らいてうさんの思い出」

『自伝』にも書かれていないらいてうさんの思い出を、お二方に語っていただきます。

らいてうさんがうちにみえたころ

東海林美知子さん



友人の関町好子さんが「らいてうの家」に行っておられると聞いて、思わず「らいてうさんは、私の家に見えたことがあるのよ」と身を乗り出してしまいました。もう半世紀以上昔のことですが、今でもはっきり覚えています。だって何日も滞在して原稿を書いていらしたのですものね。昭和28年か29年ごろだったと思います。最初の自伝『わたくしの歩いた道』（昭和30年刊）の原稿を書いておられたのではないでしょうか。

私はそのころ中学生でした。父を亡くし、母（田中良子）と二人で静岡県伊東市にあった叔父の持ち家に身を寄せていたのです。叔父は目黒四郎といい、戦前から目黒書店という出版社をやっていました。自宅には富本憲吉さんの壺などが飾られていましたね。伊東の家は叔父の両親が住んでいたのですが、二人とも亡くなり、私たち親子が管理をするようになったのです。

どうしてらいてうさんが来られるようになったかは分かりませんが、伊東の家には矢内原忠雄さん

とか佐多稲子さんといった文化人の方がよく泊まりに来ていました。旅館ではないけれど、母は調理師の資格もあったのでお食事を出したりしてお世話をしていたのです。らいてうさんもその一人でした。地味な縞の着物をお召しで口数も少なく、いつも部屋で原稿を書いておられました。うちにはよく御用聞きが来ていましたが、誰もいないときらいてうさんが出たらしく、「こわい人がいたのでそうそうに帰った」といつていたそうです。おかしかつたのは、私が病気で学校を休んでいたから、らいてうさんが「手をかざしてあげる。良く効くのよ」とおっしゃったことです。そういうことに違和感があったわけではないのですが、なんだか「おそれおおい」ような「はずかしい」ような気分です。「イヤ」といつてしまいました。やはり子どもにはちよつと近づき難い感じだったのかもしれませんね。

らいてうさんのスープ

西田不折さん

僕は今、上田で西田技研という会社をやっていますが、上田に「らいてうの家」ができると聞いたとき不思議な縁を感じました。というのはもう50年以上昔、昭和28年に僕が小学校を卒業したばかりの春休みに坂城から東京へ同級生4人を招いてくれた方がおりました。その折世田谷のらいてうさんの家に行ったことがあるのですよ。夕方、小雨の中少し肌寒かったような気がします。そのときらいてうさんが温かいスープをご馳走し

でも、奥村博史さんがお孫さんをつれてこられたとき、夜になっていたので、待っていたららいてうさんのお顔がとてもやさしい表情になられたのを覚えています。お孫さんはまだ小さくて、可愛らしい男の子さんでした。母は博史さんが絵や彫金をなさることも知っていて、失礼ですが「若い燕」に興味しんしんだったようです。若々しく、素敵な方でした。

伊東の家は山に上がったところでしたが、東側の大きな窓から海が見えました。そういうところもらいてうさんのお気に召したかもしれませんね。

お風呂の窓ガラスは濃いブルーのしゃれたものでしたが昭和33年の台風で壊れてしまいました。私も高校を卒業して東京へ出ることになり、伊東の家と別れたしだいです。（武蔵野市在住）

（文責 米田佐代子）

てくれたのですね。コンソメスープでした。月桂樹の葉が数枚入っていました。忘れがたい思い出です。

どうしてらいてうさんの家に行ったかということですが、このとき僕を連れて行ったのは大竹博吉さんといつて戦前からソビエトの農業や教育の研究をし、ナウカ社というロシア文学の本を主に出す出版社をはじめた人です。そのナウカ社重役の久保梓さんが坂城出身で当時世田谷に住んでいたのです。僕はそこに泊めてもらったのです。僕はその息子さんと同級生で親しかったので彼と一緒に東京見物に行ったのです。奥さんの大竹せい



はるばる「家」に見えた
北海道平和婦人会のみなさん

「家」閉館 大掃除と反省会



今年の「家」は11月3日で閉館。4・5日は大掃除、午後
は反省会をしました。地元
のお当番確保も大変だけど、東京から来られない時のために勉強会をしてがんばりたいなど来年への抱負が話されました。

新しい事務所です



小さな部屋ですが、パソコンも入った新しい事務所です。
今日はみんなで発送を (12/15)

さんが婦人参政権運動にも参加、らいてうさんと親しかったこともあったと思いますが、戦前社会主義国の研究をしているというので治安維持法でつかまったという大竹さんが、らいてうさんの自宅に子どもを連れて行くほど親しかったのかと思うと不思議ですね。

春休みに東京見物に出てきた子どもたちを、あちこちに連れて行ってくれました。らいてうさんにも会わせておこうと思っただのかもしれないね。他の子といっしょに江ノ島へ連れて行ってくれたのですが、入口で「おじさんはここで休んでいるから行っておいで」といわれ、一回りしてどつてみるとそこになかったことがありますが、待つてもあらわれないので、子どもだけで電車で乗って世田谷まで帰ってきてしまったのですが、その後大竹さんは「海に落ちたのではないかと消防団を動員して探し回ったそうです。」



じつは当時の僕には「スープをご馳走してくれた品のいいおばあちゃん」という印象しかありませんでした。ところが1970年に、らいてうさんが「安保条約反対」のデモをしたことがあるでしょう。その写真が新聞に出たのを見てはじめて、あの人が有名な平塚らいてうだということを知ったわけです。それからまもなくらいてうさんは亡くなってしまい、お礼も言わずじまいだったなあと思いました。それで「らいてうの家」建設のとき、気持ちですが寄付をさせていただきました。半世紀前の「スープのお礼」のつもりです。
(文責 米田佐代子 杉山洋子)

好評！新刊の小冊子 『らいてうの家 四季ものがたり』



「らいてうの家」ってなにをしているの？という方にぴったりの小冊子が出来ました。

自称「森のヤマ」米田館長の執筆で、「らいてうの森」植樹や雪見、地域交流会、山菜やキノコもたのしむ「家」の四季を紹介。
表紙は美しいカラーのらいてうの家のスケッチ(永橋為成さん)、岸田衿子さんの詩も入っている豪華版です。
ご希望の方は事務局へ。頒価300円です。

〈アメリカ大統領あての手紙〉

アメリカ合衆国大統領 バラク・オバマ様

私たちは、あなたがノーベル平和賞を受賞されたことにつき、心からお祝いのご挨拶を送りました。あなたは大統領就任以来、アメリカが「唯一の核兵器を使用した国として行動する道義的責任」に言及され、「核兵器のない世界」をつくりだす希望を説いてこられました。核兵器による被爆国日本の一員である私たちは、あなたの姿勢が世界平和構築の方向にむかうとして評価されたことに深く共感し、このたびの日本ご訪問にあたってその思いを表明いたします。

私たちは、今からおおよそ100年前の1911年、女性自身による女性の自立と解放を求める雑誌『青鞥（SEITOU）』を発刊、「元始女性は太陽であった」と宣言した女性思想家・平塚らいてう（HIRATSUKA RAICHO）を記念し、彼女が遺した精神を現代に受け継ぐと活動する団体です。その中心課題の一つが世界平和の構築です。

彼女は第一次大戦後の1921年、当時のアメリカ大統領ハーディングがワシントン会議でおこなった軍縮提案に対し、各国政府が自国の軍縮には消極的で他国に軍縮を要求する傾向を批判し、そのような「国家エゴ」を放棄して「世界民」になろうと訴えました。第二次大戦後の1950年には、日本が軍事基地を持つことは戦争放棄をうたった日本国憲法に抵触すると反対して、「非武

装・非交戦」の日本国憲法九条を守る立場を表明、また再三にわたって各国がおこなっている核実験の即時停止を訴え、1971年に没するまでの生涯を平和のためにささげました。

同時に彼女は冷戦体制の下にあっても世界のどの国とも敵対関係を持たないことを主張、平和外交により核戦争の危険から世界を救うことを訴え続けました。「私の敵はただ戦争だけです」と語り、世界が一つになる道が困難であっても「私は永久に失望しない」と未来に希望を託したことは、没後38年を迎えた今こそあらためて世界の人びとの希望として語られるべきではないかと考えます。

私たちは、あなたの「核兵器のない世界」への希望が、新たな核兵器開発や保持を否定するだけでなく、地球上にあるすべての核兵器の廃絶に向かうものであることを期待するものです。世界には今なお2万発以上の核兵器が存在し、貴国はその少なくない部分を保有しています。どうか勇気を持って自国の核兵器廃絶をすすめて下さい。私たちは2010年5月開催予定の核不拡散条約（NPT）再検討会議を、核兵器全面禁止廃絶条約締結のための具体的一歩を踏み出す場にするところこそ、かつて平塚らいてうの求めた「戦争のない世界」実現の唯一の道であることを信じ、この方向にむかってあなたがいつそう奮闘されることを心から訴えて、日本からのご挨拶とさせていただきます。

2009年11月12日

NPO法人平塚らいてうの会

会長 米田佐代子

「事務局日誌」

- 10月1日 紀要編集委員会・常任理事会
- 10月9日 第3回理事会開催
- 10月13日 「会事務所」文京区小石川に移転
- 10月25日 「らいてうの森」笹寄せ作業
- 10月29日 事務局会議
- 10月31日 記録映画を上映する会主催映画会
「赤い鯨と白い蛇」上映 於日本女子
大学成瀬記念講堂
- 11月4～5日 「らいてうの家」大掃除
- 11月5日 今年度反省会 冬期閉館
- 11月10日 「らいてうの家 四季ものがたり」刊
行
- 11月11日 「らいてうの家」遺品梱包作業
- 11月12日 米大統領への手紙を米大使館に持参
- 12月3日 第4回常任理事会
- 12月11日 「らいてうの家」、第13回「女性文化賞」を受賞

青鞥100年記念プレ講座（予告）

2011年は「青鞥」創刊100年、らいてう没後40年にあたります。「青鞥」創刊100年あたり記念イベントを検討中です。

日時 2010年2月13日（土）
13時30分～16時

講師 小森陽一さん（東大大学院教授）

「漱石とらいてう」を語る

場所 東京文化会館・4階大会議室

（JR上野駅・公園改札口前）